

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：34517

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2022

課題番号：15K04216

研究課題名（和文）学習論の観点からの道德教育論の再構築 オーセンティック・アプローチ

研究課題名（英文）Reformulation of the Theory of Moral Education in relation to the Theory of Learning: An Authentic Approach

研究代表者

松下 良平（MATSUSHITA, Ryohei）

武庫川女子大学・教育学部・教授

研究者番号：50209540

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、オーセンティック・アプローチを共通の枠組みとした上で、学習論と関連づけながら道德教育論を再構成することである。このアプローチでは道德教育論は、道德や倫理が本来的に多元的であることを踏まえて構築され、学習論は、目標・合理的方法という近代教育の枠組みには回収できない人類史的な学びを基盤として組み立てられる。本研究では併せて、本アプローチを介して道德教育論と学習論を、調和や調停をめざす対話の原理によって統一的に把握することも試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

小中学校における特設「道德」の教科化が開始されたとき、教科教育としての道德教育の理論構築は大きく立ち後れたまま、「考え、議論する道德」という枠組みだけが提示された。本研究は、道德・倫理の複数性や多元性を踏まえながら、道德をめぐる何について「考え、議論する」必要があるのか、多様な角度から解明を試みた。この道德教育論およびそれと統一的理念に従う学習論は、人工知能が高度化し、正解のない問題が頻出する未来社会において人間に求められる能力や、そのような人間を育てる教育のあり方について重要な示唆を与えてくれる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to reformulate the theory of moral education in relation to the learning theory, using the authentic approach as the common framework. In this approach, theory of moral education is constructed on the basis of the pluralism of morality and ethics, and learning theory is constructed on the authentic learning with the human historical basis that cannot be recovered in the modern educational framework of goal-rational method. This study also attempts to unify moral education theory and learning theory through this approach, based on the principle of dialogue that aims for harmony and mediation.

研究分野：教育学

キーワード：道德教育 教育 学習 デューイ

## 1. 研究開始当初の背景

研究開始時には道德教育の教科化が目前に迫っていたが、教科教育としての道德教育の理論構築はほぼ未整備であった。このままでは、さまざま問題点を指摘されてきた「道德の時間」の轍を踏むことになりかねない。型にはまった授業のやり方と教師の道德的直観に依拠して営まれてきたこれまでの「道德」。それへの批判を踏まえるとき、教科化の本格的な実施を前にして、「教科」教育としての道德教育の理論の構築が急がれていた。本研究は、このような事態を見据えつつ、道德教育についての実践的・実証的研究の前提となっている包括的な理論的枠組みを構築することをめざした。

その時点で本研究代表者は、それまでの道德教育論について原理的な研究を踏まえて、道德や倫理が一枚岩ではなく、むしろ相互に対立や葛藤をはらんだものの集成的であることを指摘していた。大まかに分類すれば、ホブズに淵源し、功利主義倫理学とカント倫理学に共通するリベラリズム(その派生系としてのリバタリアニズムやネオリベラリズムを含む)の道德、C. ギリガン(C. Gilligan)やN. ノディングズ(N. Noddings)以来大きく注目されるようになったケアの倫理や責任=応答可能性(responsibility)の倫理、A. マッキンタイア(A. MacIntyre)、C. テイラー(C. M. Taylor)、M. サンドル(M. J. Sandel)らに代表されるコミュニタリアン(共同体主義者)の道德、といった相互に異質なものの総体が広義の道德なのである。しかも、ここに見出される道德・倫理の多元性は、リベラリズムの枠内で説かれる「価値の多様性」とはまったく異なる。価値の多様化論が前提とする「善に対する正の優位」をケア論やコミュニタリアニズムは批判するからである。

そのときこれらの多元的な道德・倫理は、人びとが日々直面する道德的問題や学校の「道德」教育とどのように関係するのか。「考え、議論する道德」としての教科「道德」においてそれらの道德・倫理をどのように教え、学ぶのか。これらが本研究の出発点にあった問いであった。

一方、研究代表者はそれまでに、近代教育に特有の考え方である教えることの「因果モデル」とは異なるものとして、教えや学びの「呼応モデル」を提示していた。道德・倫理の多元性に依拠した道德教育論を構想するとき、「考え、議論する道德」と整合するのは、「因果モデル」ではなく「呼応モデル」である。かくして、「呼応モデル」の学習論を前提として、道德科における学習過程の理論的構造、および学習することに内在する道德教育的側面の解明も試みたいと考えられるようになった。

学習論、道德教育論とも世界的にみて豊富な研究蓄積があるが、両者を結びつけようとする研究はまだほとんど見当たらない。その一方で、道德教育の機能を併せ持っている学習の「呼応モデル」は、日本の歴史的伝統の特異性を反映している側面があるとはいえ、近代西洋が産み出した学習論の行き詰まりを根源的に克服する可能性をもっているという予感もあった。

## 2. 研究の目的

本研究課題では、(1)道德・倫理の多元性に依拠した道德教育、特に「考え、議論する道德」としての道德科における道德の学習過程の理論的構造の解明、および(2)「呼応モデル」の学習

論がもつ道德教育の側面の解明、という2つの課題を並行的かつ相関的に進めることを目的とした。最終的には、道德教育の実践や研究のためのより包括的な理論的枠組みを構築することが目的であった。

このとき、その包括的な理論枠組みを可能にすると考えられるのが、本研究でいうオーセンティック・アプローチである。そこにおいて道德教育論は、国民形成という目的や政治的意図（被統治者を都合よくコントロールするといった意図）から切り離されて、たとえば数学教育が数の論理に依拠するように、道德・倫理そのものに根拠を置く。すでに述べた道德・倫理の多元性である。学問的な吟味を経た多様な道德観や倫理観を包摂し調停する立場からなされる道德教育を、本研究ではオーセンティックな道德教育と呼んだ。

一方、道德科という日本特有の教科に関連した本研究独自のこのような用法とは異なり、「真正な（オーセンティックな）学習」という考え方に見られるように、学習論におけるオーセンティック・アプローチはすでに国内外で広く受け入れられている。とはいえ、「真正な学習」とは何かについては、多様な解釈に開かれているのもまた事実である。そこで本研究では、合理的計画や目標 - 合理的方法という枠組みに従う近代教育が必然的に要請する学習ではなく、そこに回収しえず、近代教育よりも歴史的・社会的にはるかに広範囲に受け入れられてきた学習を準拠枠とする考え方を、学習論におけるオーセンティック・アプローチとして位置づけた。

かくして本研究は、道德・倫理の多元性を踏まえて「考え、議論する道德」としての道德教育論の理論と、人や事物や出来事等の環境との対話に基づく「応答モデル」の学習の理論とを、調和や調停をめざす対話の理念によって接合し、統一的に把握することも目的としていた。

### 3. 研究の方法

本研究は実証的な研究ではなく、哲学的な論証や手法を基本とした理論的研究である。道德や学習については、近年さまざまな学問分野で急速に研究が進んでいる。そこで本研究でも、教育学や哲学・倫理学だけでなく、認知科学、心理学、人類学、生物学、政治学、等の多様な学問分野の文献（図書や論文）にもっぱら依拠した。そのため本研究では、研究課題を一つずつ遂行して研究成果を積み上げていくというやり方というよりも、「研究の目的」で述べた研究課題や目的をめぐって、道德・道德教育や学習に関する多様な学問分野の理論的・実証的な研究成果にその都度学びつつ、多様な角度からアプローチしていくという手法を採った。

したがって、研究計画としては、「道德・倫理の多元性の関連づけと教育内容の明確化」、「道德・倫理の多元性を反映した道德の学習過程の解明」、「学習過程に内在する道德的・倫理的価値の解明」、「「価値」「善」に方向づけられた学習に内在する道德教育的機能の解明」といった筋道を想定していたが、結果的にはその順番通りに研究が進んでいったわけではないし、力点の置き方ではかなり濃淡もあった。研究課題がより具体的に設定される中で、これらの諸課題は相互に関連づけられながら進行したという側面が強い。

### 4. 研究成果

## (1) 道徳教育、特に「考え、議論する道徳」としての道徳科における道徳の学習について

まず、道徳・倫理の多元性を考慮した場合の道徳教育の内容の明確化を試みた。リベラリズムの諸道徳、ケアの倫理や責任の倫理、共同体道徳といった学的省察の対象となっている道徳・倫理だけでなく、人々が慣習や常識として従い、日々の生活を通じて継承してきた道徳もある。これらを区分けし、相互に比較対照した上で、道徳・倫理の総括的なマッピングを試みた。

そのうえで、道徳科の構成原理（基本理念や実践の基底的原理）を提案した。公教育としての学校教育において道徳科の教育はどのようにすれば正当化できるのか、という問いを追究する中で、道徳科がめざすべきものは何か、そこにはどのような意義があるのか、について一定の方向性を示した。さらに、学校における「道徳」教育の意味や役割を原理的に問い直し、「考え、議論する道徳」としての道徳科の再定義を提案した上で、道徳科の学習指導要領、教科書、評価等のあり方について再検討する際の方向性についても提案した。

現代日本社会では 道徳の軽視や矮小化 という現象が広く見られる。そのような状況下では多様な道徳観の対立を調停するための「考え、議論する道徳」は困難であると考えて、道徳のアンラーン（学び直し・学びほぐし）という教育的課題についても論じた。自らが当たり前と考えている狭隘な道徳観を一旦宙づりにして、人類の歴史的遺産としての基本的な諸道徳を改めて発見するという課題である。

さらに、発展・応用編として、主権者教育を題材にして、道徳教育と生活指導の関連についても論じ、両者はどのような意味で相互浸透し、相互補完的になりうるかについて考察した。また、障害者（児）をエンパワーするという観点から、障害児教育における道徳教育や道徳科の今後の展望についても論じた。上記のような研究成果や前提を踏まえて、大学の教員養成課程における道徳教育論のテキストも編集した。

## (2) 「呼応モデル」の学習論の展開およびその学習と道徳教育との関連について

「呼応モデル」の学習論は、アクティブラーニング論や「資質・能力」論や「主体的・対話的で深い学び」論との対決、およびそれらの再解釈を試みる中で、その理論的な深化を試みた。

まず、アリストテレス由来の 魂による学び とデカルト由来の 心による学習 という学習観の枠組みを設定し、特に「能動」と「受動」の関係に焦点を当てて、アクティブラーニングの問題点について考察した。アクティブラーニングは思考の活性化をめざすが、考察の結果に従えば、心による学習 と結びつく場合には失敗が避けられない。主体的・能動的な思考を促すために必要なのは、アクティブラーニングという学習方法というより、むしろ「魂の受動」に立脚した 魂による学び への学習観の転換であることを指摘した。

「呼応モデル」の学習論からみれば、「資質・能力」論にも本質的な問題がある。認知や思考を個人の内部にある心や脳の働きに還元する考え方を批判し、行為・知覚・思考を一体のものとして捉える新しい科学的・哲学的な思潮に従えば、「資質・能力」論に基づく教育は致命的な限界や欠陥を抱えている可能性がある。この問題は、資質・能力を（近代教育の意味で）「教育」することがはたして可能なのか、という問題にもつながっている。

資質・能力を「教育」することができないのであれば、「主体的な学びは教えることができるのか？」という問いが生まれる。主体的に思考し判断する力や学び続ける力が幼児教育から大学教育まで求められているが、教師の計画に従い、教師が工夫し配置した学習法によって身についたものを「主体的」とみなしてよいのか、という根本的な問題である。この問題を打開する糸口は、人類史にあまねく見られる伝統的な「学び・教え」にある。人類史的に普遍的な学びという土台に、本来の役割に限定した近代の「教育」と「学習」を結びつけることが必要なのである。さらに「主体的・対話的で深い学び」については、そこで前提とされている学習観に着目しながら、その学びが抱えている困難や限界をいくつか指摘し、それらの困難から抜け出すための手がかりについても提示した。

上記のような考察は、本研究において「エコロジカルな学習観」と名づけた新たな学習観の提案につながっていった。データ駆動社会の出現により、歴史的産物としての近代の教育は実際には効力を失いつつある。教育の大胆な問い直しや公教育の目的や役割の転換が迫られる時代には、新たな学習観を前提にすれば、(人工知能とは異なって人間のみがなすものとしての)対話や責任といった概念を中心に据えた教育や教育学が必要になる。そのことについてもいくつかの論稿で論じた。

### (3) 道徳教育論と学習論を媒介するものとしてのジョン・デューイの哲学 = 教育思想の研究

道徳教育論を学習論の観点から捉え直し、学習論を道徳教育論として捉える視点を提供してくれたのはデューイの哲学 = 教育思想であった。本研究でも、その「原点」に立ち帰って研究の土台を鍛え直す試みも並行して続けられた。

まず、デューイによる道徳授業批判を承けて、デューイの理論枠から示唆される別種の道徳授業の可能性を探り、そのような道徳授業への授業観の転換を促すための仕掛けとしてアクティブラーニングを位置づけることを試みた。その結果として、デューイが重視していたにもかかわらず、今日のアクティブラーニング論が無視しがちな(とりわけ道徳教育に関係する)論点を浮き彫りにした。

また、近代哲学批判と共鳴しつつも、その批判が陥りがちなポストモダンの懐疑論を乗り越える可能性を秘めた思想としてJ. デューイを位置づけ、デューイの教育論を学習の方法論ではなく学習の思想として再定位するとき、その学習思想が、ポストモダンの懐疑論に侵食された社会における教育と民主主義の形骸化をどのようにして乗り越えていくことができるか、についても考察した。さらに、デューイの「経験の再構成」としての教育という考え方を、来たるべき教育思想として読み直すことも試みた。新教育が陥りがちであった二項対立(経験 vs. 知識、等々)への批判者としてデューイを位置づけるとき、デューイ思想がもつ固有の意義は、むしろこれから大きくなるともいえる。デューイの教育思想に秘められている可能性を開示するための手がかりとなりうる視点を、いくつか提示してみた。いずれにせよ、これらの研究は、上記の(1)や(2)の研究を深化・発展させる際に重要な示唆を与えてくれた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計35件（うち査読付論文 14件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 Matsushita Ryohei	4. 巻 Published online
2. 論文標題 Toward an ecological view of learning: Cultivating learners in a data-driven society	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Educational Philosophy and Theory	6. 最初と最後の頁 1~10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/00131857.2022.2094242	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松下良平	4. 巻 815
2. 論文標題 学校・教育を問い直し、教育の魅力を再発見する	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 教育と医学	6. 最初と最後の頁 4-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Morimichi Kato, Ryohei Matsushita, Masamichi Ueno, Kayo Fujii, Yasunori Kashiwagi, Naoko Saito, Tomohiro Akiyama, Fumio Ono, Mika Okabe, Jun Yamana, Shigeki Izawa, Yasushi Maruyama, Miyuki Okamura, Ruyu Hung & Duck-Joo Kwak	4. 巻 Published Online
2. 論文標題 Philosophical Reflections on Modern Education in Japan: Strategies and Prospects	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Educational Philosophy and Theory	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/00131857.2021.2017884	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 岡部美香、大塚類、坂井祐円、鶴野祐介、倉石一郎、松下良平、古波藏香	4. 巻 27
2. 論文標題 『教育学のパトス論的転回』を読む(1) さまざまな臨床の視点から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大阪大学教育学年報	6. 最初と最後の頁 41-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松下良平	4. 巻 76/9
2. 論文標題 不同意のすすめ 時代に逆行する学校を問う	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育研究	6. 最初と最後の頁 22-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松下良平	4. 巻 590
2. 論文標題 教育の新たな可能性と危険な罫 いずれの道を選ぶのか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教職研修	6. 最初と最後の頁 108-109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松下良平	4. 巻 121
2. 論文標題 二一世紀における教育観の転換 直進の文明と逍遙の文化の対立を調停する	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育哲学研究	6. 最初と最後の頁 112-137
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kato Morimichi, Saito Naoko, Matsushita Ryohei, Ueno Masamichi, Izawa Shigeki, Maruyama Yasushi, Sugita Hiroataka, Ono Fumio, Muroi Reiko, Miyazaki Yasuko, Yamana Jun, Peters Michael A., Tesar Marek	4. 巻 Published online
2. 論文標題 Philosophy of Education in a New Key: Voices from Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Educational Philosophy and Theory	6. 最初と最後の頁 1~17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/00131857.2020.1802819	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 松下良平	4. 巻 44
2. 論文標題 教育と人間の変容の中の教育学教育 「育てる」教育のために大学に何ができるか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 関西教育学会年報	6. 最初と最後の頁 197-201
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松下良平	4. 巻 119
2. 論文標題 虚空に漂う教育 人間不在の「資質・能力」論の陥穽	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育哲学研究	6. 最初と最後の頁 13-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 MATSUSHITA, Ryohei	4. 巻 4
2. 論文標題 Education Without Consideration of Human Inquiry: Flaws in Arguments on Competencies	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 English E-Journal of the Philosophy of Education	6. 最初と最後の頁 40-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松下良平	4. 巻 46
2. 論文標題 道徳を再発見する教科へ アンラーン(unlearn)という課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 九州教育学会研究紀要	6. 最初と最後の頁 21-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 松下良平	4. 巻 119
2. 論文標題 人権教育と道德教育	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 子どもの道德	6. 最初と最後の頁 12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松下良平	4. 巻 1220
2. 論文標題 「考え、議論する道德」は何をかえるのか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学校教育	6. 最初と最後の頁 62-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松下良平	4. 巻 1221
2. 論文標題 正解のない道德 無償の愛はよきものか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学校教育	6. 最初と最後の頁 62-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松下良平	4. 巻 1222
2. 論文標題 正解のない道德について「考え、議論する」授業	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学校教育	6. 最初と最後の頁 62-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松下良平	4. 巻 1223
2. 論文標題 道徳の常識を問い直す	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学校教育	6. 最初と最後の頁 62-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松下良平	4. 巻 1224
2. 論文標題 道徳は毒にも薬にもなる	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学校教育	6. 最初と最後の頁 62-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松下良平	4. 巻 1225
2. 論文標題 生の実相に寄り添う道徳教育へ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学校教育	6. 最初と最後の頁 62-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松下良平	4. 巻 67/11
2. 論文標題 思想なきアクティブラーニングを転換する	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 体育科教育	6. 最初と最後の頁 12-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松下良平	4. 巻 58
2. 論文標題 道徳教育とアクティブラーニング デューイから何を学ぶか	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本デューイ学会紀要	6. 最初と最後の頁 177-187
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松下良平	4. 巻 20
2. 論文標題 道徳科の可能性と課題 「考え、議論する」道徳の再定義に向けて	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本教育方法学会第20回研究集会報告書	6. 最初と最後の頁 4-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松下良平	4. 巻 28
2. 論文標題 鑑識眼的評価と哲学的思考 評価の枠組みから教育を問い直す	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 児童教育	6. 最初と最後の頁 47-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松下良平	4. 巻 33
2. 論文標題 主権者教育の目的と課題 生活指導と道徳教育の協働のための一つの試み	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 生活指導研究	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松下良平	4. 巻 25
2. 論文標題 学習思想史の中のアクティブラーニング 能動と受動のもつれを解きほぐす	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 MATSUSHITA, Ryohei	4. 巻 11
2. 論文標題 The Paradox of Evidence-based Education: From the Decline of Education to Abandonment of the Theories of Education	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Educational Studies in Japan: International Yearbook	6. 最初と最後の頁 101-119
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松下良平	4. 巻 43-8
2. 論文標題 道徳教科化と国民国家をめぐる政治学 いずれのシナリオを選ぶのか	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 169-183
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松下良平	4. 巻 82-2
2. 論文標題 エビデンスに基づく教育の逆説 教育の失調から教育学の廃棄へ	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 教育学研究	6. 最初と最後の頁 16-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松下良平	4. 巻 112
2. 論文標題 道徳科構成原理論Ver1.0	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 教育哲学研究	6. 最初と最後の頁 16-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松下良平	4. 巻 43-3
2. 論文標題 道徳教育と『道徳』教科化をめぐる課題と展望 障害者のエンパワメントに向けて	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 障害者問題研究	6. 最初と最後の頁 234-239
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松下良平	4. 巻 24
2. 論文標題 道徳教育の思想と政治をめぐる三つの断章	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 84-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松下良平	4. 巻 832
2. 論文標題 道徳教科化にどう向き合うか	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 教育	6. 最初と最後の頁 58-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松下良平	4. 巻 110
2. 論文標題 『道徳科』学習指導要領の可能性と落とし穴	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 子どもの道徳	6. 最初と最後の頁 7-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松下良平	4. 巻 693
2. 論文標題 道徳についてなぜ、何を考えるのか	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 道徳教育	6. 最初と最後の頁 7-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松下良平	4. 巻 1
2. 論文標題 公教育としての道徳教育に期待すること 何について「考え、議論する」のか	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 道徳教育論叢	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 9件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松下良平
2. 発表標題 公教育としての道徳教育に期待すること 何について「考え、議論する」のか
3. 学会等名 日本道徳教育方法学会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松下良平
2. 発表標題 教育と人間の変容の中の教育学教育 「育てる」教育のために大学に何ができるか
3. 学会等名 関西教育学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松下良平
2. 発表標題 虚空に漂う教育 人間不在の「資質・能力」論の陥穽
3. 学会等名 教育哲学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松下良平
2. 発表標題 道徳を再発見する教科へ アンラーン(unlearn)という課題
3. 学会等名 九州教育学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松下良平
2. 発表標題 道徳科教育をシティズンシップ教育として再定義する そのために考えるべきいくつかの問題
3. 学会等名 日本教育学会（「近畿地区」研究活動）（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 松下良平
2. 発表標題 道徳科の可能性と課題 道徳についてなぜ「考え、議論する」必要があるのか
3. 学会等名 日本教育方法学会（第20回研究集会）（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 松下良平
2. 発表標題 道徳教育とアクティブラーニング デューイを媒介として
3. 学会等名 日本デューイ学会（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 松下良平
2. 発表標題 道徳教育と生活指導の連帯の可能性を探る オーセンティックな道徳教育の立場から
3. 学会等名 日本生活指導学会（招待講演）
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 松下良平
2. 発表標題 「資質・能力」の育成と「考え、議論する道徳」 今の学校のOSで新しいアプリを使えるか？
3. 学会等名 日本カリキュラム学会（招待講演）
4. 発表年 2023年



〔図書〕 計11件

1. 著者名 古屋恵太監訳・松下良平（解題）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 408
3. 書名 デューイ著作集2 哲学2：論理学理論の研究、ほか デモクラシー／プラグマティズム論文集	

1. 著者名 國崎大恩・藤川信夫編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 北樹出版	5. 総ページ数 209
3. 書名 実践につながる教育原理	

1. 著者名 日本デューイ学会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 340
3. 書名 民主主義と教育の再創造	

1. 著者名 田中智志編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 368
3. 書名 教育哲学のデューイ 連還する二つの経験	

1. 著者名 グループ・ディダクティカ編（松下良平ほか執筆）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 288
3. 書名 深い学びを紡ぎだす 教科と子どもの視点から	

1. 著者名 森田尚人・松浦良充編（松下良平ほか執筆）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 344
3. 書名 いま、教育と教育学を問い直す 教育哲学は何を究明し、何を展望するか	

1. 著者名 加藤宣行、松下良平	4. 発行年 2017年
2. 出版社 光文書院	5. 総ページ数 160
3. 書名 子どもに寄り添う道徳の「評価」	

1. 著者名 田中耕治、松下良平	4. 発行年 2017年
2. 出版社 協同出版	5. 総ページ数 234
3. 書名 道徳教育	

1. 著者名 教育思想史学会、松下良平	4. 発行年 2017年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 888
3. 書名 教育思想事典・増補改訂版	

1. 著者名 松浦良充、松下良平	4. 発行年 2015年
2. 出版社 一藝社	5. 総ページ数 208
3. 書名 現代教育の争点・論点	

1. 著者名 教育哲学会（今井康雄、松下良平、ほか）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 -
3. 書名 教育哲学事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------